



折口信夫コレクション

第四巻

使用方法

目次の操作方法

表示させたい部分にカーソルを近づけると手の形に変わるので、ここでクリックすると該当のページまでジャンプします。

本文から目次へのジャンプ方法

本文ページの右上にボタンがあります。
これをクリックすると、目次のページまでジャンプさせることができます。

口譯萬葉集（上）

目次

口譯萬葉集(上)

卷第一	二
卷第二	九
卷第三	六
卷第四	一五
卷第五	二八
卷第六	三七
卷第七	三四
卷第八	三八
卷第九	四三
卷第十	四六

□わたしは、國學院大學を出てから、足かけ三年、大阪府立今宮中學校の囑託教師となつて、其處の第四期生を、三年級中途から、卒業させる迄教へてゐた。わたしは、其八十人ばかりの子どもに接して、はじめて小さな世間に觸れたので、雲雀のやうなおしやべりも、栗鼠に似たとびあがりも、時々、わたしの心を曇した悪太郎も、其から又、白眼して、額ごしに、人をぬすみ見た、河豚の如き醜い子も、皆懐しい。この書の口譯は、すべて、其子どもらに、理會が出来たらう、と思ふ位の程度にして置いた。いはゞ、萬葉集遠鏡なのである。

大正五年八月廿九日

槐の夏陰にかくれて

著 者

萬葉集 卷第一

雑の歌

雄略天皇の御代

天皇御製

1 籠^{フシ}もよ、み籠^{フシ}持ち、掘^{フシ}串^{フシ}もよ、み掘^{フシ}串^{フシ}持ち、この岡に菜^{フシ}つまず子。家^{フシ}宣^{フシ}らへ。名^{フシ}宣^{フシ}らさね。空^{フシ}見^{フシ}つ大和の國は、おしなべて吾^{フシ}こそ居^{フシ}れ。しきなべて吾^{フシ}こそ坐^{フシ}せ。吾^{フシ}こそは宣^{フシ}らめ、家^{フシ}をも名^{フシ}をも

舒明天皇の御代

1 籠^{フシ}や、籠^{フシ}や。その籠^{フシ}や、籠^{フシ}を持つて、この岡で、菜^{フシ}を摘んでゐなさる娘^{フシ}さんよ。家^{フシ}を仰^{フシ}つしやい。名^{フシ}をおつしやい。此大和の國は、すつかり天子として、私が治めて居る。一體に治めて私が居る。どれ私から言ひ出さるか。わたしの家^{フシ}も、名^{フシ}も。(上代に於て、如何に皇室が簡易生活をしてゐられたか、此御製で拜することが出来る。殊に素朴放膽で入らせられた、雄略帝の御性格は、吾人の胸に生きた力を齎す。)

天皇が、香具山に登らせられて、國見せられた時の御製

2 大和には群山あれど、とりよるふ天の香具山、登り立ち國見をすれば、國原は煙立ち立つ。海原は鷗立ち立つ。可憐國ぞ。蜻蛉洲大和の國は

天皇、宇智野に狩に出でさせられた時、中皇命（後に、皇極天皇）間人、老をやつて、献上おさせになつた

御歌

3 安治し、吾大君の、朝には取り撫で給ひ、夕にはいよし立たし、御執しの、梓の弓の長弭の音すなり。朝獵

に今たゝすらし。夕獵に今たゝすらし。御執しの梓の弓の、長弭の音すなり

反歌

4 たまきはる宇智の大野に、馬竝めて朝踏ますらむ。その草深野

讃岐の國安益郡に行幸せられた時、軍王山を見て作られた歌

5 霞立つ永き春日の暮れにける判別も知らず、群肝の心を痛み、鶯子鳥うら嘆をれば、たまだすきかけの宜しく、遠つ神吾大君の行幸の山越しの風の、獨りをる我が衣手に朝夕にかへらひぬれば、健男と思へる我も、

2 大和の國には、澤山な山はあるが、その中で天の香具山、その山に登り込んで、領分を見はらすと、人の住んである平野には、鷗が立ちこめてゐる。それから、（海の様な）壇安の池では鷗が群れをなして、あちらでも立ち、こちらでも立ちしてゐる。立派な國だよ。朕が治める蜻蛉洲と稱する、この大和の國は。

3 此國を安らかに治め給ふ天皇陛下が、終日大事に持つてゐられる、即、朝には手に執つて撫でなされ、夜になると、御傍に立てゝおかれるといふ風に、大事になさる、梓でこしらへた弓の、長い弭が、弦の響で鳴る音がする。朝獵

として、今舉行なされるのであらうと思ひ、又日暮れになると、夕獵として、今舉行なされるのであらうと思ふ。お別れ申して都にゐると、朝晩お弓の長弭の音が、どうかすると、耳に幻覺として聞えて来る。

4 宇智の地の廣い原に、馬を竝べて、朝歩きまはつてゐられることであらう。あの草の深い野を。（一絲紊れない修辭は、感佩すべきことである。併し、既に漢文脈を引いた様な、變化に乏しい、といふ難は免れない。）

5 永い春の日が暮れ遅くて、暮れたのやら暮れぬのやら區別も訣らない、さういふ時に、心痛して心の中で嘆いてゐると、貴い我が天皇陛下下の行幸先の、行宮のほとりにある山を越して吹く風が、戻るといふ詞だけは辻占よく、妻に離れて獨りゐる自分の袂に、朝晩に幾度も繰りかへして吹いて来るので、其都度、自分は立派な男だとは思つてゐながら、旅にゐるのであるから、其悲しい心をうつちやる手だてもつかないので、譬へて云へば、近くの綱の浦で、蟹女

くさまくら旅にしあれば、思ひやる
たつきを知らに、綱の浦の海人處女
らが焼く鹽の、思ひぞ焼くる我が下
ごゝろ

反歌

6 山越しの風を常じみ、寝る夜落ちず、
家なる妹をかけて慕びつ

皇極天皇の御代

額田ノ女王の歌

7 秋の野のみ草刈り葺き、宿れりし宇
治の都の假廬し思ほゆ

齊明天皇の御代

額田ノ女王の歌

8 熱田津に船乗りせむと月待てば、潮
も適ひぬ。今は漕ぎ出でな

紀伊の温泉に行幸の時、額

田ノ女王の作られた歌

9 三栖山の檀弦はけ、わが夫子が射部
立たすもな。吾か偲ばむ

中皇命（倭姫皇后）、紀伊

10 君が齡も我が齡も知らむ岩白の、岡
の草根をいざ結びてな

11 我が夫子は假廬つくらす。草なくば、
小松が下の草を刈らさぬ

12 我が欲りし野島は見しを、底深き阿
胡根の浦の珠ぞ拾はぬ

中大兄（天智天皇）の三山の

13 御歌。一首並びに短歌。二首
香具山は畝傍男々しと、耳梨と相諍

たちが焼いてゐる鹽の様に、表面には現さないが、焼き付
く様な氣のする、底の心持ちだ。

6 山越しに吹く風が、始終吹いてゐるので、寝る晩毎に、何
時でも、家にあるいとしい人のことを、心に思ひ浮べて、
焦れてゐる。（一體に長歌は、外界の描寫は、極めて微力な
ものとしか現されてゐない。此長歌に於て、客觀事象が明
らかに深い印象を與へるのは、注意すべきことである。）

7 以前、野の薄を刈つて、屋根をこさへて宿つた事のある、
宇治の行宮の假小屋の客子が思ひ出される。

8 伊豫の熱田津で、舟遊びをせう、と月の出を待つてゐる中
に、月も昇り、潮もいゝ加減になつて來た。さあもう漕い
で出ようよ。

9 紀伊の國の三栖山の檀でこさへた、弓に弦をかけて、あの
御方は、今頃張り番をつけておいて、獸狩りをしてゐられ
ることだ。其にわたしは、かうして焦れてゐねばならぬか。
（この歌は、萬葉第一の難訓の歌とせられてゐるもので、こ
れも亦、一説と見て貰ひたい。萬葉辭書の中「三栖山」參照）

10 岩白の岡の草を結んで無難を祈るといふが、わが夫なる天
子の御命も、亦私の命も、お護り下さる岩白の神のゐられ
る岡の草をば、どりや、結んで行きませうよ。

11 あなたは今假小屋を作つていらつしやるが、屋根に葺く草
がなければ、わたしのあるこの小松の下の草をお刈り下さ
い。

12 都に居る時分から、見たい／＼と想うてゐた、野島はやつ
との思ひで見たが、底の深いよい景色の阿胡根の浦は、ま
だ其地に臨まないの、下りて珠を拾ふことも、えせず
にある。

13 昔女山なる香具山が、同じ女山なる耳梨山と、畝傍山を男
らしい山だ、と奪ひ合ひをしたと云ふが、戀ひの道にかけ